

自宅で暮らし、日常的に薬を飲んでいる高齢者の約 4 割が、6 種類以上の薬を併用しているとの調査結果を都健康長寿医療センター研究所のチームがまとめた。

高齢者に有害な副作用が出やすいとされる薬を飲んでいる人も約 3 割いた。横浜市で6月 12 日から始まる日本老年医学会で発表するという。

高齢者は薬を分解する機能が低下しており、副作用が出やすい。

6 種類以上の併用は、薬の組み合わせによる相互作用で、転びやすくなるなど、体調不良を招く恐れが更に高まると指摘されている。

本調査は、2013 年 11～12 月、東京都内の自宅で暮らす 65 歳以上の約 1300 人を看護師らが訪問して調査を行い、服薬の内容が確認できた 885 人分を解析したものだ。

その結果、36%の高齢者が 6 種類以上の薬を飲んでおり、10 種類以上の人も 9% いた。中には 17 種類を服用している人もいた。

記憶力を調べる簡易検査で、認知機能に障害ありと判定された人は全体で 11%だったが、6 種類以上飲んでいる人では 18%と比率が高かった。

また、米国の指針で、高齢者が服用を避けるべきとされる薬を 1 種類以上服用している人は 28%いた。運動機能の低下や転倒を招きやすいといわれる睡眠薬などが多かった。

高齢者は、高血圧や糖尿病、ひざ痛など複数の病気を抱え、いくつもの医療機関を受診することが多い。それぞれの医療機関でバラバラに薬を処方されるうちに、次第に薬の種類が増え、過剰投与になり易い。高齢者が多数の薬を飲んでいると、転倒のリスクが高まるなどの報告が複数ある。漫然と処方され、飲み続けるケースも多いという。不眠や体のだるさを訴え多くの薬を飲んでいた高齢者が薬を整理して改善したケースも珍しくない。

日本老年医学会は近く改定する「高齢者の薬物療法指針」に、注意すべき薬のリストを盛り込むという。 (2015/06/11 読売新聞から)